

岡見正雄・林屋辰三郎編『文学の下剋上』書評

青 木 晃

「文学の下剋上」とは、一体如何なる事象をとらえての命名なのであろうか。「下の文学」が「上の文学」をのり越えて、新たに社

会の表面に登場してきたということなのだろうか。「下」とは何か、「上」とは何か。私は、こんな幼稚な設問から出発してみようと思

う。

『太平記』の語るような自由狼藉の世・中世後期が、いかなる由をもつて「下剋上」の世界なのか——本書は、この問いに対して、耳に聞く「二条河原落首」のリズムの中に、眼に見る「洛中洛外図」の世界の中に、一つの流動の世を再構成し答えようとしているのである。

そもそも、新しい時代の到来とは、価値観の変動・価値体系の一変変化を、その基底に擁しているべきである。日本の歴史、特にその文化史を、古代と近代に二大別しようとするなら、南北朝より応仁文明の大乱期をその屈折点に考えようと私は思うのだが、本書はその事由をかなり明確に示してくれているようである。

即ち、本書の担当するこの時代（鎌倉幕府崩壊から徳川幕府成立前夜まで）に、「ばさら大名」佐々木道誉や高師直にその典型をみるような人物が、まずいきいきと自分の道を歩み出したのである。それは、人間的才能と経済力（有徳）とを持ち、なお且つ、權威的なる世の規範がくずれ行く時にあって、可能事だったということが解明されてゆく。「阿弥の人々」の文化界への登場にも、また違った意味で、このことはあてはまらう。郷村に於ける郷民達・都市（マチ）に於ける町衆は、こんな時にあつてもっともいきいきと活動したオピニオンリーダーでさえあつたといえよう。「洛中洛外図」を背景に「職人屋」を置いて、四条のにぎわいを中心に「下京の世界」を絵解きされると、そこに中世後期の京がストゥップモーションのフィルムのように動き出す。（「あら面白の都や」の章）

戦乱の世を描いた『太平記』の世界（「下剋上の合戦記」の章及

び『太平記』物語）と平行して、一方には、しだれ桜の下に集う奇合の文芸が花開き（「花の下の奇合文芸」の章）、猿楽が庶民の嗜好に合った劇として育ちつつあつた世界が語られている（「育ちゆく猿楽」の章）。日本の歴史に対する時、一方に激しい戦乱の血が流れていても、そんな風などど吹くかと知らん顔の平和で明るい人々の生活が、又一方に共存する事実に度々驚くのだが、中世はその最たる時であつたと私は考える。それこそは、地下の人々の生命のエネルギーだとも云えようか。これらの人々は自分達のロマンを育て、語り継いでゆく。これも一つの生きる糧である。云いかえること、「義経記」や『自我物語』はこういった類のものではなからうか。

以後、義満・義政を中心にした北山・東山文化の時代相を、「北山殿の唐物数寄」「東山殿の芸術生活」ととらえ、特に応仁の乱後の戦国の世の群雄割拠が日本の地方文化進展に力あつた様を「戦国乱世と小京都」と描いて、中世後期の日本全国がどのような姿を整え、そこに生きる人々がどんな感懐を胸に抱いたかを再構成してゆく。この時代の文学・芸術の様は、これまでの事務的な（？）文学史記述の範疇にもどして云うと、能狂言については「世阿弥の世界」「猿楽の展開」「をかしの庶民芸能」、五山文学は「叢林・林下の文化」、和歌文学は「敷島の道の終焉」、連歌は「連歌会所の宗匠たち」「犬筑波の連歌」、物語草子は「町衆の文学・御伽草子」、歌謡「ただ狂へ一期は夢よ」と冠して、描かれてゆくのである。このタイトルのそれぞれが、この本の特色をすでに十分物語っているといえよう。従来の無機的なジャンル別記述をさけて、時の人々の何気ない日常とその好みが文化面に投影した必然の姿として、文学

の個々の事象をとらえようとしているのである。従つて、よい意味で、一読大変面白い。「事實は小説より奇なり」である。我々は、本書を通じて、明るい笑いの時代「中世」の人々とともに存るが如き感興を味わうことが出来る。

最初へもどらう。「下剋上」——「下」とはなにか。地下の人々、伝統的な權威というべきものには縁がなく、この乱世を自分のもつ生きたエネルギー（知恵や富や腕力、そして神仏の加護など）で明るく乗りきつて行こうとする人々、そして新しい価値観を持った人々である。「上」は、伝統的な權威によって生きる人々……中世後期、「下剋上」の世にあつて、「下」の人々に歓迎され、やがてこれらの人々によつてうみ育てられていった文化・文学の本質を把握しようとする意が、「文学の下剋上」一巻ではある。編者は「時と所をおかない闘ぎあひの日常化は、同時に自由狼藉の空気を生み、その混沌のなかから、庶民は寄りあふことを知り、衆の力に目をひらかれていったのである。（中略）やがておとずれてくる近世の徳川幕藩体制は、上向し外へ発散しようとする民衆のエネルギーを、ふたたび鎖国体制の桎梏のなかに窒息させてしまうが、それだけに、その前に位置する、解放感にみち活力にあふれたこの時代の意義は、ひじょうに大きくたいせつである。日本のながい歴史のうえでも稀有の高揚を示したこの時期に、かずかずの文学や芸能を生み出し、人間のドラマを織りなしたのは、まさしく庶民の力なのであつた。では、彼らのそうした疾風怒濤のバイタリティーの秘密は、いったいどこにあるのだろうか。それをさぐり検証していくことがこの巻の主題であつた。」と、そのあとがきに云う。文化は、それ個人で

流れない。人間の生活・歴史と、有機的に表裏をなす。

ただ、「下」の人々は、文化に近ずいてくると、より「上」の權威的なものを求めたがる傾向を有するという歴史上の一般の真理（成上り者根性）をも見落してはならないが……「下剋上」といった最初の立場と、狂言の笑いの立場との間には、相違があるという認識は、本書の面白い物語性の中でもなお見落してはならないのである。

本文中の表現——「このような自由狼藉の世界のひらかれたことは、人間精神の解放にも通じていた。人間として真に自由で個性的な思索がこころみられ、それを体系的に発表しようようになった時期として、この中世という時代は、高く評価されてよいと思う。（中略）そのような人間の思索は、当然に行動を伴うものであつた。ながいあいだ、律令制という王法や鎮護国家の仏法という「法」的世界に規制されていた人間が、ここにみずからの歩みを始めるのである。人々の歩みにつれて、自然に道が生れてくる。人それぞれに異なる道があつてもよいが、多くの人々のふみ通う道は、しだいに大きくかつ固められ、やがては、このちの人々の歩むべき規範としての「みち」として残されてくる。「道」理とは、そのようなものであらう。」は、本書一巻の結語ともいえよう。

最後に、この本（この講座全巻に共通するが）の特色をあげると、々茶の間で楽しむ新しい教養の本々と謳われる如く、一つに茶の間の（茶の間にはテレビがある）で見て、楽しい。それは写真挿入の多用のみならず、所々にカコミ記事があつて、ほんと緊張をはぐし、なお且つ新たな興味をひく。また一つには、資料にしっかりと裏付け

られながら時の人々の生活が物語られ、活きたドラマとして盛り上りのあるのは読者の心象風景を豊かにして楽しい。これは新しい教養としての人間の歴史である。ただ、物語的構成力のある楽しい章と、説明的の平板な記述の章との交錯が少々あって、違和を感ずることなきにしもあらずではあったのだが……。

これは決して入門書ではない。

岡見正雄・林屋辰三郎編『文学の下剋上』（「日本文学の歴史」第六卷）昭和42年10月20日・角川書店・四九八頁・六五〇円  
共編者・岡見正雄氏は、本学教授、文学博士。